
Dirty twin blood(連載Ver.)

神童サーガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dirty twin blood (連載Ver.)

【Nコード】

N2955F

【作者名】

神童サーガ

【あらすじ】

短編と同じ双子が学園生活をします。特にバットエンディングとかにはしません。といってもハッピーエンドでも無いです

Chapter0 プロローグ(前書き)

更に腹黒度がグレートアップした(になると思う)双子をお楽しみ下さい

Chapter 0 プロローグ

プロローグらしきもの・・・

誰かといられたら、それだけで私は強くなれる

それが私の半身なら、それだけで十分だ

だけど、血という絆があっても脆い

砂のようにサラサラと手から抜け落ちる

・ さよふなら、さよふなら、さよふなら、さよふなら、さよふなら、さよふなら、さよふなら、さよふなら、さよふなら、さよふなら・・・

私の愛した人達

私が嫌いな人達

私を壊した人達

もう・・・
会う事は無いだろう

だって・・・

この世にはいないから

Chapter 0 プロローグ（後書き）

さあ！！始まりました！！一応、次の話にキャラクター設定を作ります

Chapter 番外 キャラクター設定（前書き）

— 応分かりやすいようにキャラクターを作りました

Chapter番外 キャラクター設定

キャラクター設定

名前：雛菊ひなぎく 水仙すいせん

性別：女の子

年齢：八歳

性格：腹黒第一号

人に執着は全くせず、一匹狼（弟は別）

容姿：誰もが振り返る天使

髪は白色で腰まであるが手入れはせず（弟が勝手にするから絹のよ
うに柔らかい）

目は髪とは逆で真っ黒

色白で華奢

身長：140cm

体重：ここ、殺されますよ!?

名前：雛菊ひなぎく 桜さくら

性別：男の子

年齢：八歳

性格：腹黒第二号

天然でのんびりとしている。一応優しい

容姿：水仙と同じく天使の顔

髪はピンク色の肩までの長さ（もちろんサラサラ）

目は水色

身長：140cm

体重：微妙な黒いモヤが・・・

学園者

名前：斉藤さいとう 雀すずめ

性別：女の子

年齢：八歳

性格：バカ。とにかくバカ（双子は天才）

容姿：双子には及ばないが美少女
髪は朱色のショート
目は赤色

身長：146cm

体重：うにゃくと意味不なセリフを言い逃げました

名前：鈴木^{すずもと}奏^{かなで}

性別：女の子？

年齢：9歳

性格：男勝りだけど実際に男

容姿：女の子の容姿で筋肉質

髪は黒のポニーテール

目は藍色

身長：150cm

体重：・・・竹刀を振り回されました

名前：相田あいだ 深太浪しんたろう

性別：男の子

年齢：9歳

性格：爽やかスポーツ少年だけど、ドM

容姿：美少年かな？

髪は黒の短髪

目は同じく黒

身長：158cm（クラスで一番高い）

体重：48キロらしい

名前：豊田とよた 彦磨ひこまる

性別：男

年齢：八歳

性格：影が薄い。根暗。ツッコミ役（多分）

容姿：地味。ザ・地味
見た目はパツとしない
目は金色

身長：151cm

体重：44キロ

名前：矢澤^{やざわ} 蓮^{れん}

性別：男（双子達の担任）

年齢：22歳

性格：温厚で優しい。双子も滅多に弄らない

容姿：眼鏡掛けて見た目はドSっぽい
髪は銀色の短髪

目は青

身長：185cm

体重：62キロ

Chapter 番外 キャラクター設定（後書き）

個性豊かななあ。主人公以外は可哀相なキャラクターなんです。どうでも良いけど。

Chapter 1 秘密と秘密と秘密(前書き)

やっぱり後半からグロさが目立ちます。前半は、のんびりど…
?

Chapter 1 秘密と秘密と秘密

この話は、可愛い天使の（ような）双子が変な世界へ行く前の話です。（えっと短編にて・・・）

「どーでも良いから話を始めてよ」

「・・・スイちゃんが飽きる前に!」

はいはい。分かりましたよ。

今、双子がいるのは寮完備の学園です。

幼、小、中、高、大とエスカレーター式なんです。

双子には両親がいないので、ここの学園長が養ってくれてる（らしい・・・脅してるといふ噂もある。こちらのほうが信憑性が高い）

「失礼なこと考えなかった？作者」

「・・・分かってるよね？」

・・・すびばせん（訳：すみません）!!
ですが、情報の一部です・・・

「プライベートのへったくれも無いわね」

「どうでも良いよ」

「そうね」

双子は、さっさと教室に入ってく

「おっはよーん」

「・・・」

「・・・・・・おはようスズメ」

「姉は無視か！！弟に至っては何だその間は！！」

「おはよう奏」

「うっす！！相変わらずだな」

斉藤雀・・・バカ

鈴木奏・・・男女男

「バカって失礼だなあ！！」

「・・・ウチに至っては何？」

「バカはそのままよ」

「カナは男の子だもん」

そうだ。鈴木奏は見た目は男女のように見えるが実際に男なのだ。
ややこしいけどね。

後は設定見れば分かるけどね。

「よっ!!」

「おはようシン君」

「……あのぉ」

「……」

「こらっ双子!!無視すんじゃね!!」

「豊田……いつからいたんだ？」

「……鈴木が話してるとっから」

「つまりはぁ……最初っから？」

「そっだ……」

「……(影が薄いから分からなかった……)」

「アンタの影が薄いから分からなかったのよ」

「(喋っちゃった!?)」

「なっ……」

「どうせ、みんなも思ってたんでしょ」

「サクラ!!」

「思ってたんだ……」

「……あ……」

相田深太浪……スポーツ少年

豊田彦磨……良く分からない

「なんか……嫌な予感がした」

「……気のせい」

「・・・はい」

双子の目は笑って無いが天使の笑みを向けたら黙った。
あの笑みに勝てる者はいないから。

「さあ、席に着け！！着かない奴は・・・」

「（何なんだ！？？気になる！！）」と、クラス全員が思った。

「・・・相変わらずだねスイちゃん」

「あのバカ先」

双子除いて。

矢澤蓮・・・双子の担任で、DSっぽい詳しくは不明（どっちにしろ双子には勝てない）

「微妙なセリフが聞こえたが・・・まあ、いい。授業を始めるぞ」

微妙とは失礼な。

蓮は教科書を開き黒板に向き合った（別に黒板が好きという訳では

無い)

「……(暇だなあ)」

「……(暇ねえ)」

双子だから同じ言葉という訳では無い。二人には、テレパシーのよ
うな力があるのだ。だから、片方が辛かったり悲しかったらすぐに
分かってしまう。便利のようで厄介な能力だ。

それと、双子はサボってるのを、なぜ教師の蓮が怒らないかとい
うと怖いから……。だけでは無く(まあ、怖いけど)頭が普通の常識
を超え素晴らしく良いから必要無いのだ。

そのせいで、化け物扱いを受けてたが

「(何か事件が起こらないかしら?)」

「(起こったら大変だよ?)」

「(つまらないじゃない)」「
」(そうだけど・・・)」「

水仙の席は窓側の後ろ側で、桜はその前だ。

「どこか、爆発しないかな?」

「!?!?」

「スイちゃん!!声に出てる!!」

水仙の恐怖のセリフにクラス全員がビクツツとして、ブリザードが・

皆、寒そうにしている。

水仙は気付いて無い。

桜は啞然としてる・・・のか?

「はあ・・・」

「(溜め息つきたいのはクラスのみんなだよ)」

水仙は天然だったっけ?とおもう桜だった。

「って、天然ってどーいう意味?食べれるの?」

「食べれねーよ!」

「豊田くん。うるさいです。授業中ですよ」

「卑怯だー!!」

何故か影薄（影が薄い奴を略して）が怒られた。
まあ、双子を怒るなんて出来ないからね。

「・・・あれ？」

「どうしたの？」

もう、堂々と会話をしてる。

周りは黙ってるが聞き耳を立てている。

「あそこに幽霊がいる・・・」

水仙の言葉にざわつく教室。中には立ち上がる生徒もいる。

「え？」

「ほらっ、校舎の近くの木に・・・」

途中で黙った水仙。

何名か好奇心で近付いて来た。

「……………顔を探してる頭から上が無い腐
敗した女性が」
「ぎゃーーーーー!」

多分（いや、絶対）わざと溜めて言ったね。
確かに外には水仙の言った通りの人物（？）がいた。
桜は青ざめながら下がってく。

「あれ？サクラ君も苦手だったけ？」

妖しい笑みを実の双子の弟に向ける最低な姉。

「…………スイちゃん？」
「…………蓮サボるわね」
「疑問符無いじゃないか…………行って来い」
「ほら、行くわよ。サクラ君」
「い、行くの？」
「幽霊が私達に勝てると思ってるの？」
「…………そりゃあ」

水仙は桜の手を“無理矢理”掴んで走ってった。
珍しく桜は泣きそうな顔をしているが…………

場所・・・校舎の近くの木（あの場所です）

「わたくし顔はどこ？」

「（・・・グロい）」

「ねえ・・・ブス」

「!？」

「アンタ・・・私をブスと言ったわね!!」

「普通に話せるじゃない・・・ウザいわね」

「・・・私が怖くないの？」

「怖いって言うのはね・・・こういう事よ!!」

ナイフを取り出し人差し指に傷を付けた。

鋭利なナイフだったため（斬り方が上手だったためか）痛みは無い。そして、僅かに血が流れた。水仙は流れた血を舐めた。口の横に血が付き、口元が上がった。

それが、妖しく色気があった。

小学生らしくない怖さと色っぽさがあった。

顔が無い幽霊さえも見惚れてしまうほどだ。

桜は、頭を抱えた。

それよりも、指を斬ったのは水仙がMというわけではなくて（むしろSだろ）水仙の口に含んだ血は水仙の手に触れた途端に固形にな

った。
その、固形になった血を水仙の妖しい笑みに動けなくなった幽霊に近付き触れた。

「私達の血には様々な効果がある……例えば……」

首の断面にグジャグジャに塗り付けた。

水仙は、その時も快感のような笑みを浮かべてる。

幽霊は、もがき苦しんだ。

そして、水仙はそつと幽霊から離れた。

「その血は、身体中の細胞内を侵し続け……やがて……」

水仙の言葉が止んで数秒後……バーツンとボガーンが混ざって、良く分からない擬音を出した。

そこには、さつきまで呆然と立っていた幽霊はいなかった。

爆発の元は、どうやら幽霊だったらしい（幽霊が爆発するのは不明だが、水仙には不可能は無いという事なのか……）

「ありがとうサクラ君……」

「相変わらず惨い……」

「思って無いくせに・・・」

どこから出したか分からない傘を使って、水仙に返り血を浴びせないように庇っていた。

「・・・後悔はしてないわ」

「僕だつて・・・どうしようも無い事だから」

「“生きる爆弾”か・・・」

「それだけじゃ無いでしょ？」

「まだまだあるのよね？」

「スイちゃん」

「ん？」

「ナイフ貸して？」

「良いけど・・・」

水仙は分からないという風に首を傾げた。

「ちく・・・!」

「っ・・・」

桜は自分の指を水仙のように斬った。
声を掛けようとしたが止めた。

「呑んで？スイちゃん……」
「……ん。ありがとう」

水仙は桜の指から血を呑んだ。まるで吸血鬼のように……

「スイちゃんが破壊なら……僕は癒しだから」
「……っ」
「あまり使わないで？スイちゃんは貧血になりやすいから……」
「……ん」
「スイちゃんは、僕より“弱い”し“脆い”から……」
「弱くなんて……無い」
「……寿命だって」
「言わないで」
「!?!」

桜が何か言おうとした途端に、水仙は手で桜の口を押さえた。
水仙は桜の指から口を離れた。

「よし。もう大丈夫ね」
「……」
「守られるほど弱くは無いわ」

「（分かつてるよ．．．でも、たった一人の肉親だから）」
「．．．ありがとね。でも、サクラ君には幸せでいて欲しいのよ」
「（卑怯だよ．．．逃げるの？）」
「逃げ切ってみせるわ．．．私だもの」
「（数秒早く生まれたからって．．．）」
「姉ぶって悪い？こうでもしなきゃ．．．自分が保てないもの．．．」
「

桜は、未だに塞がれてるせいで喋る事が出来ない。

桜は何も言えないが悲しげな顔をしている。

「絶対にサクラ君を傷付けないから」

「（．．．僕だって）」

二人を、そつと見守るような薄い二つの月が照らしていた。

一つの月は、燃えるように。

もう一つは、哀しむように．．．

Chapter 1 秘密と秘密と秘密（後書き）

グロくてすみません！！（人によってはまだまだかももしれないけど）
ってか、いきなり秘密バレたって有り得ないよね？

Chapter 2 虚空の声（前書き）

オリキャラがいきなり出てしまいました

Chapter 2 虚空の声

「さて、脱獄しますか？」

「……なんで脱獄？」

桜の指は、傷跡すら残って無い。
なぜ、脱獄なのか……

「これを見て」

水仙が桜に出したのはプリント。
さほど大きくない。
内容を桜は読んだ。

「えーっと……『裏社会会合』??？」

「……表に出れない人。例えば人を殺したとかね。そういう人達を集めるみたい」

「なんで会合？」

「……歩きながら話すわ」

「どうやら拒否権は無いらしい。」

二人は高い（普通の塀の十倍）を軽々と乗り越えた。

場所・・・会合（例の所）

「えつと・・・なんでジャングル？」

「・・・ただの会合だと思ってる？」

「スイちゃんが楽しんでるから違うよね？」

「そう・・・サバイバルよ」

「犯罪者同士で？」

「・・・ええ」

裏社会会合の詳しい内容『これは只の会合では無い。これはサバイバルなのだ。このサバイバルでは戦い合うのだ。もちろん生死を掛けて。勝った者〃生き残った者は表社会で生きられ、一生遊んで暮らせるだけの賞金をあげます。ただし、生死に関しては当人は責任を一切受けませんので悪しからず』

「スイちゃんは何を考えてるの？」

「試してみたいことがあってね」

「また・・・“血”？」

「流石ね・・・」

水仙は目を細め微笑んでいる。
まるで楽しみを体中で感じる子供のように……

「んと……」

「何も考えなくて良いわよ」

「だって……僕は戦えないし」

「私は……戦えなんて言っていないわ」

「でも!」

「それに……あつという間だしね」

「……うん」

まだ何か言いたかったようだけど水仙も黙ったから止めた。

そして、中に入ると水仙の表情が曇った。
いや、桜もだ……

「ああ？ガキが何しに来たんだよ」

「さっさと帰んな」

テレビや指名手配で見たことがある顔が沢山あった。

その中で入口の近くにいた柄の悪い（当たり前だが）二人組が因縁（？）をつけてきた。

「さっさと帰れ・・・」
「なんでアンタみたいなブ男に言われなきゃいけないのよ」
「んだとテメー！！」

水仙に殴りかかってきたが水仙はスツと避け男の脇腹をキックをした。

余談だが水仙の靴は鉄ブーツよりも硬い。しかも、それなのに羽根よりも軽いらしい。

そんなブーツで蹴られた日には・・・
死んじゃうんじゃない？

まあ、手加減してみたいだし。

「っ・・・」

「てめっ！！」

「!？」

弱そうに見えた桜を狙う、もう一人の奴。

水仙と桜の距離はかなりある。

男は桜に殴りかかった。

だけど・・・

「大事な弟に手を出さないでよね」

「な・・・に!？」

「スイちゃん・・・」

水仙は男の手を自分の腕をクロスして防いだ。

男は、ひ弱そうな女の子に防がれたのが驚いてた。

桜は心配そうに水仙を見つめる。

「おいたをする悪い子はお仕置が必要ね」

「!？」

あの鉄のブーツで男のこめかみを、思いつ切り蹴った。

ジャンプ蹴りで宙に浮かんだ身体を捻らせ、もう一足で蹴った。つ

まりは、まわし蹴り。

蹴り終わったあと、宙で回り着地した。

他の奴等は水仙の強さに怯え始めた。

「軽い脳震トウね・・・一生治らないけど」

「どこが軽いの？」

「さあ？」

「はあ・・・」

双子は、倒れてる二人組を無視して、人が集まって無いイスに座った。

すると、スーツを着た男がやって来た。

手には、お盆と飲み物が乗っかってたからボーイのようだ。

「スイちゃん・・・」

「お飲みになりますか？」

「一応私達は未成年ですからジュースはありませんか？」

「今、お持ちしますが・・・リクエストはありますか？」

「・・・オレンジ。サクラ君は？」

「僕も・・・」

「違うのにしなさいよ」

「え？」

「交互に飲めば二倍楽しめるでしょ？」

「うん・・・じゃあ・・・んん、リンゴあるかな？」

「では、オレンジとリンゴですね？」

「もちろん果汁100%よ？じゃないと・・・分かるわよね？」

「・・・では、お持ちします」

ボーイは奥に向かったのを見て桜は水仙に聞いた。

「あまり変化なかったね」

「少し脈拍が上がったけど・・・ポーカーフェイスが上手ね」

「タダ者じゃない？」

「そこらにいる奴等よりはね」

ボーイの違和感に気付いた様子だったが、気にして無い二人だった。

「今、気付いたんだけどね？」

「なに？」

桜が、ふと気付いたことがあつたらしい。
水仙は何という風に気付いて無いみたいだ。

「作者がさっきまでジャングルって書いてたじゃん？」

「ああ、そうね」

「なのにあ、今ここはどこ？」

「……あのバカ作者」

すみません。

書き忘れてました。

今は大きなビルの待合室です。

そのビルの中にジャングルがあります。

なぜ、それなのにジャングルがあるのかって分かったかというところ

・
スケルトン……

全面ガラス張りで壁というコンクリートは無かったのです。だから、中まで丸見えということ・・・

「つまりさあ、普通バレるよね？こんな事してたら」

「それは発案者の罫よ」

「え？」

「多分ね、私達が最後で来るはずが無いと思ってたの」

「????」

「こんな大きなビルだもの。壁を作るお金だってあるわよ」

「犯罪者達が来た時には・・・」

「ガラス張りでは無かった」

「・・・」

「発案者は随分と歪んでるのね」

「こんな事考えるもん」

「それだけでは無いわ」

「え・・・」

「・・・殺し合ってる所を普通の一般人達に見せつけるのよ」

「そっか!？」

「ジャングルもガラス張り・・・こちらからは見えないうようにしてるしね」

「特殊な鏡みたいに？」

「ええ・・・しかも、生きてる奴等がいれば警察に御用と・・・」

「つ・・・僕達は？」

「上に行くわよ」

「換気扇探さないかね？」

彼女達は、何を考えているのだろうか。
そこに、さっきのボーイがやって来た。

「申し訳ありませんが、お客様達は及びではないようです」

「上に行く階段はどこ？」

「あちらにありますか……？」

「行くわよ！」

「う、うん」

訳が分からない顔をしてるボーイを置いて、さっさと階段を上って
行った。

あ、ついでに持って来たジュースを奪って……

「ん〜。ここかな？」

「みただね。ここの換気扇からジャングル内が見える」

「さて、ショータイム」

水仙はナイフで……

では無く指を、歯で切った。

血を口に含み、噴出した。

霧吹きみたいにジャングル内に行き渡った。

「さて、発案者の元へ行きますか」
「そうだね。ここは時間の問題だし」

双子は、換気扇から離れた。ついでにいうと天井に隠れてたみたいだけど。

そして、一番豪華なドアを見付けた。

「こんにちは」

「君達が例の子だね」

「・・・そうだよ」

「あら？テレビ中継してるの？残酷なテレビ局もあったものね」

「くくつ。確かにな。今から殺し合いが始まるんだからな」

「それは無いわね」

「なんだと！！」

社長らしき男は、見るからに立派なイスに座っており、水仙の言葉に顔を真っ赤にして机を叩いた。

「今ごろ・・・感染してるわね」

「か、感染だと！？」

「ちよつと細工させて貰ったわ」

「・・・何を？」

「スイちゃんの血は傷口・・・または、目や鼻から入り込み身体中の細胞を破壊する」

「つまり、生きて帰れる人はいない」

「・・・ふっ。面白い」

「一つ聞いて良いかしら？」

「なんだ？」

「あのボーイは何者？」

「知らねー。アイツも犯罪者だったらしいが、良く働くからな、置いてやっただけだ」

「素性は知らないと？」

「ああ。それにしても、ガキに見えねーな」

「悪かったわね」

見た目は子供だが、口調、オーラ全てが大人以上なのだ。

「そうだ。私達を身売りしても無駄よ？」

「なっ！！」

「この会社に細工してるよ」

「貴方は私達のような子供を外国や少女趣味の奴等に売り渡したり、こういう死合（試合だけど生死をかけるので）をお金を賭けたりしてるのでしょ？」

「なぜ知ってる！！」

「それは答える必要無いしね」

「おい！！！！」

男は誰かを呼んだらしい。現れたのはボーイ。

「こいつらを傷付けずに捕まえる」

「分かりました」

「逃げなくて宜しいのですか？怪盗さん」

「何をおっしゃってるの分かりませんが・・・」

「数年前に行方を眩ました怪盗がいたって」

「それは、貴方でしょう？」

「おいつどうい事だ！！」

「感染する前に逃げた方が良いのでは？」

「・・・まさか」

「そう。この会社内にも感染血を流しました」

「クスッ。貴女達は素晴らしい方ですね。私が片付けようとしてた

仕事をこなすなんて・・・いとも簡単に」

「貴様！！」

「あとは、ここのお宝を頂戴しようかね」

「私は興味無いからどうぞ勝手に」

「僕も興味無いし」

「では、お先に失礼しますね・・・おっと、お子様達にこれは無いでしょう」

ボーイ・・・否、怪盗は社長に近付き懐から拳銃を奪った。

社長は、「くそっ・・・計画が・・・」と、言っていた。

怪盗は拳銃を持ったまま空を飛び出して消えた。

「貴方に騙された方達は地獄に居ますからね」
「随分と可愛がってもらえるね」

双子はドアから出た。

そのドアの内側から、声にならない叫び声が出た。そして、数秒もすれば気配が無くなった。息絶えたようだ。

この事は、ニュースで話題となった。

有名な社長が、犯罪者達を使って賭をしていた。

賭の相手も見つかり、逮捕されたという事だ。

そこも、また有名な社長だったらしい。

拳銃を密輸してたこともバレたらしい。これは多分、怪盗が警察に突き出したのでしよう。

Chapter 2 虚空の声（後書き）

学園キャラがいなかったあ！！ヤバイヤバイ

Chapter 3 平和な日常？（前書き）

この話はグロくはありません。毒舌注意報だけど・・・

Chapter 3 平和な日常？

学園に戻って来た双子は学園長に怒られています。

え・・・そんな訳無いって？

さすがですね。

確かに双子を怒れる人はいません。

「二人共・・・危ないことはしないでくれ・・・いやっ！！しな
いでください！！」

なぜ急に敬語になったかというと・・・

みなさんが思いのとおり、部屋の中が暗くなりました。

多分、二人のせいでしょう。

「私達が何をしようと貴方には関係無いでしょう？」

「だけどな？死んでしまつたら何も思えねーんだぞ？」

「死ぬつもりは無い」

「アイツらのとこになんて逝きたくない」

「・・・」

「一緒なんてイヤよ・・・」

「俺も悪かったって思ってる。気付いてやれなかったから」

「・・・」

なぜか暗い雰囲気になってしまった。
双子の過去を学園長は知ってるみたいだ。
まあ、この話はいずれするとして。

「帰るから」

「……ああ」

双子は、さつさと帰った。

教室に行く……

「ねえ、何で教室破壊されてんの？」

「知らないわよ」

見るも無残な教室。

イスも机も木っ端微塵（合ってるっけ？）
コップミジン……

「楓ちゃん……何があるの？」

「あ、あの……」

くりもと
栗本 楓 かえで

性格は照れ症で、オドオドしてる。
クラスで一番まともで委員長。

「す、雀ちゃんが・・・」

「あのバカが？」

「ゆ、幽霊騒ぎに暴れて、そのままで・・・か、片付けなかったの」

「まだ、あのネタが・・・」

「続いたんだね」

どうやら幽霊騒ぎが落ち着いて無く、雀が暴走したらしい。クラス全員が押さえようとしたが無理だったらしい。

「授業はどうなるの？」

「や、休みだつて・・・みんな嬉しがつてた」

「そりゃあね」

「・・・僕達どうする？」

「一緒に買い物行かねーか？」

「奏・・・」

「男物買うの？」

「からかうなよ・・・女物に決まってるだろ？」

「き、決まってるの？」

「ああ、そうだ」

「お・か・ま」

「スイ!!!」

「スイちゃん・・・言い過ぎだよ」

「本当の事だよ」

「スイ〜!!!」

竹刀を振り回し水仙を追いかける。

水仙はサツと避ける。

奏と水仙のせいで、更に教室が破壊されたのは言っまでも無いだろう。

「ふ、二人共やめて〜!!!」

「止めるって二人共」

「黙れドM」

「ははっ・・・言われても傷付かねーよ」

「・・・傷付いてよ」

奏と水仙の毒舌にダメージの無い深太浪。
それにツッコミ(?)した桜。

「オレを無視するな〜!!!」

「『『『 黙れ影薄』』』」

「『『『 』』』」

「影薄じゃねー!!! 栗本も黙るんじゃねー!!!」

「ご、ごめんなさい」

「楓は悪くないだろ影薄!!」

「影薄がふざけないでよ!!」

「逝け影薄」

「影薄言つなー!!しかも桜!!逝けつて!!」

「ははっ影薄」

「ドM黙れ!!」

「つてか、雀は?」

「あのバカ見ないわね」

「が、学園長に怒られています」

「なるほど・・・」

「先生も一緒にな」

「うわー蓮可哀相」

「思つて無いくせに・・・」

「棒読みだったね」

「仕方がねーよな」

壊れた教室から離れなよ。

危ないよ?

キャラクターが増えれば面倒になってきた。

「自業自得よ」

「誰か消せば?」

「っっ!?!」

「わ、私出たばかりです」

「楓は無いわよ」

「一番まともだし」

「影薄ヤラレキャラだし」
「皆がなんだけど・・・」
「ウチが一番危なかったり？」
「俺も・・・ドMでも・・・」

安心してください。誰も消しませんから。

「神様だ〜!!」
「忘れる事はあるんじゃないかしら？」
「一人忘れられてるし」
「せ、先生も・・・」
「先生は大事でしょ」
「そ、そうですね」
「作者〜!!」

忘れませんって・・・多分。

「多分言っなー!!」
「今、この時が一番出てる事忘れてるのか？」
「あ・・・」
「影薄に言われるなんてね」
「って、作者・・・影薄の名前忘れてんじゃない？」

・・・

場所は移り学園内にあるシヨッピングモール。
とてつもなく大きい学園だから、何でもありません。

「いきなり？」

「作者・・・スルーしたわね」

「・・・」

「な、泣かないでください。豊田くん」

「さすが委員長!!!」

「うわー好きだ!!!栗本」

「え!?!」

「「照れ症の楓に何言ってるの!!!」」

「ひっ・・・雛菊双子がキレた」

顔を真っ赤になった楓。

それに怒った双子。

ごみ捨て場には影薄の遺体が・・・

「し、死んでませんよ!!!」

はい。生きてますよ。

ちっ・・・

「さ、作者さん？」

「言っておくけど作者もお腹真っ黒なのよ」
「僕達ほどじゃないけどね」
「……」

黙る三人。

そっか消されたいのか……

「……すみませんでした!!」
「さっさと買い物しましょ」
「(主人公だからって……)」
「何か言ったかしら? ドMとオカマ」
「な、何も言ってますん!!」
「早く逝こうよ」
「サクラ!？」

買った物リスト

水仙……本ゲロいの

桜……本(黒いの)

奏……服(ロリ系)

深太浪……本(スポーツ関連)

楓……服(ナチュラル系)

で、一度も事件は起こらなかった。

珍しい事もあるもんだ。

でも、本を買う時に脅したという情報があり、警察が来たらしく、直ぐさま青ざめて帰ったらしい。

さすが双子・・・

Chapter 3 平和な日常？（後書き）

キャラクターが本当に大変です。でも、みんな個性豊かだからなあ。

Chapter 4 確かな温もり（前書き）

少しづつ真相が見え始め・・・無いかもしれません（はい？）

Chapter 4 確かな温もり

今いるのは寮。

寮だからといって狭い訳では無く、一軒家並に大きい。

双子は、悲しい過去のせいか一人で寝る事が出来ない。だから、一緒に寝るのだ。また、寝てる姿は天使だ。本当に天使だ。黙ってれば可愛い天使しゅっかいはまだ寝てないみたいだけど。

「なんか、味薄くない？」

「本当だ・・・んゝ何が足りないんだろう？」

「・・・ダシが薄いんじゃない？」

「あ、あと醤油」

双子は一緒に食事を作って食べてたらしい。

いつもと違う味付けに悩んでた双子。

美味しいことには変わらないけど、気に食わないらしい。別に双子が完璧主義者という訳では無い。

「」「ごちそうさまでした」「」

どうやら食べ終えたらしい。

双子は自分の食器をキッチンに持って行き洗った。

そして、一緒に洗った。

「今日は先に入ってた？」

「スイちゃんは？」

「ちよつとね」

どうやらお風呂の話のようだ。

小学生三年生だから、しかも双子だから一緒に入る分には問題は無いだろう。

「ちゃんと後で入ってね？」

「うん……」

先に浴室へ向かった桜。

水仙はソファに横になった。

時折、何か考えるように目を瞑りながら……

「……アイツがいた」

会合で会った人物を思い出してたみたいだ。

決して怪盗の事では無い。

あのビルに入った瞬間に顔色が変わった。その時を思い出してるみたいだ。

「・・・アイツは死んだはず・・・あの人が殺したんだから」

幽霊さえも怖がらなかった水仙が、なぜか焦っている。(?)

「考えても仕方が無いか・・・入ろ」

場所・・・お風呂

「サクラ君？」

「・・・」

「サクラ!!」

「っ!?!?スイちゃん・・・」

「どうしたの？」

「あっ・・・なんでも無いよ？」

「まだ、髪洗って無いじゃない」

「あゝ忘れてた」

「逆上せる(のぼせる)からほらっ・・・」

風呂場のドアを開けたら、桜はボーツと湯船に浸かってた。桜を見

れば髪が濡れて無い。まだ洗って無いらしい。
二十分位、水仙は考えてたから・・・よく逆上せなかつたな。
水仙が、湯船に入ると同時に桜が上がり髪などを洗い始めた。
水仙は、桜の考え事が分つた。水仙と同じ事だろう。さっきまで考
えてたこと・・・
嫌でも分かり合ってしまう。多分、他の双子よりも・・・
彼女らの“呪われた血”のせいで更に苦痛だろう。

「ねえ・・・」

「いつか分かるから気にすることは無いわ」

「・・・やっぱスイちゃんも」

「アイツは死んだ・・・私達の前で」

「僕達は見捨てた」

「捕まつてたんだから仕方無いじゃない」

「うん・・・」

お風呂から上がり、二人の頬は微かに紅くなる。

水仙はソファにドカッと座った。

桜は水仙の後ろに周った。

「スイちゃんは女の子なんだから自分でやんないかね？」

「面倒」

「その言葉で片付けないで」

桜は水仙の髪を梳かしている。

毎日の日課みたいなものだ。

水仙は面倒な事は嫌いで、桜は、それを保護する。

桜は水仙の言葉に苦笑いを浮かべながらも手を休めなかった。

水仙は、気持ち良さそうに目を閉じる。

「生き神かしら？」

「アイツは神なんかじゃない!!」

「あの人の方よ・・・私達にとっては神様」

「そうかも・・・しれないけど・・・でも、僕は・・・あの人が怖い」

「・・・でも、いないから」

「うん・・・交通事故だっけ？」

「あんなに強かったのに呆気ないわね」

「子供を助けるためだっけ・・・」

「あの人らしい・・・」

「もう・・・やめよ？いなくなった人の話は・・・」

「・・・」

静かな時間が流れてく。

この後数分は、どちらも話さなかった。

ベット内

二人は手を繋ぎながら寝ようとしている。
温かい手。脈拍が伝わる。同じリズム。ここまで似る事はあるのだ
ろうか。

・・・恋人繋ぎか。

寝返りの心配するのは作者だけだろうか。

「水を差さないで作者」

すみませんでした。

桜は何か言いたそうにしている。

水仙は目を一度瞑った後、喋り出した。

「そういえば、五年忌・・・ね」

「!?!」

「早いわね」

「・・・“殺してから”か」

「・・・」

お互いの手が強くなる。二人の不安を拭うように・・・
二人は眠りににつき、周りは彼女達の寝息しか聞こえない。

Chapter 4 確かな温もり（後書き）

次の話は双子が黒くなる理由が分かりますかもです（だから？）

Chapter 5 過去は過去のままで（前書き）

長いしグロさが目立ちます。ギャグ無しだしオリキャラがいきなり増えます。

Chapter 5 過去は過去のままで

「た、ただいま・・・」

公園から、先に帰った自分の姉がいるだろうと思家に入った。家の中から聞こえてきたのは姉の声では無く、何かを叱る声・・・怒り狂った女の声。

「・・・す、スイちゃん？」

肩につかないが乱雑に伸びたきつた髪。オドオドとしてる少年・・・桜。

幼いながらも慣れた廊下を歩く。

ギシギシと嫌な音が響く。

少しづつ脳が冷えてく。

嫌な予感がヒシヒシと伝わってくる。

今まで廊下を歩く時、壁に手を付いただろうか？

壁は、自分の手より冷えてビリツと痛くなる。

一つの部屋に辿り着く。

そこから、物が落ちる音や割れる音、叫び声・・・

でも、姉の声はしない。

なんで・・・

「痛いんだろ？」

どこも怪我をした覚えは無い。それなのに、なぜ痛いんだろ？
苦しんだろう？

ドアを開ける手が拒む。

開けるなど・・・

痺れる手を無理やり正してバツと開けたら、そこには・・・

「す、スイちゃん？」

「・・・帰って来ちゃったの？サクラ」

「・・・逃げてサクラ君」

「逃がさないわよ」

「!？」

ポロポロになった姉。

服がビリビリに破かれ、露あじわになった肌は、赤く線が入る。可愛い花柄の絨毯には血だまりが出来てた。

最初見た時は、生きてるか分からなかった。
声を掛けてくれたからホツとした。

背中まであった髪は、短くなり自分と同じ長さになった。

女・・・自分の母親の手には血の付いたナイフ。包丁だろう。

「っ・・・う・・・あ」

「逃げなさい!!」

掠れた声で逃げると自分に言うが、全く足が動かない。
涙ぐんで、視界が歪む。

逃げろ

逃げろ

逃げろ

頭に言い聞かす。

全く役に立たない。

例え逃げ切っても、子供と大人の差だ。逃げ切れないだろう。

「う、あ・・・」

「逃がさない・・・」

「あーっ!!」

ナイフの動きが止まった。

いや、女の手が止まったのだ。

水仙は、苦しそくに女を睨むが、こっちを見ない。

「ふふ・・・あの人がいけないのよ・・・こんな化け物作って・・・それなのに・・・他の女を作って・・・」
「な、に・・・を？」

女は桜の服を脱がし始めた。

水仙は身体が冷めて動けない。

血を流し過ぎたようだ。

二人の行為を、ただ見てるしか出来なかった。

「・・・・・・・・さ・・・・・・・・く・・・・・・・・ら
「・・・・・・・・す・・・・・・・・い・・・・・・・・」

助けて

助けて

助けて

助けて

桜の声が頭に響く。

実際に喋って無いのに……

水仙は手を強く握り締めた。

「（神様……お願い……大事な弟のため……悪魔の力を……使わせて……ください）」

必死に願った。

例え自分の身体を悪魔や閻魔に渡したとしても……

お願い

お願い

お願い

人を殺させてください。

自己防衛のために・・・

この世で、たった一つの最愛のもののために・・・

「ヤメローーーーーー!!!!!!」

何とか最後の力を振り絞って立ち上がる。

行為をしていて、遠くへ投げたナイフを取った。

女は気付いてはいない。

桜は、泣きながら水仙を見つめる。

「っ・・・っんく(スイ・・・ちゃん?)」

泣いてるせいでしゃくり上げる。

それが苦しそうに息をしている。

水仙の目には光は宿って無かった。

もう・・・どうにでもなれ、という風に・・・

「なっ!!」

女の背後に立った水仙。女は、やっと背後の様子に気が付き、後ろを振り返ると水仙がナイフを持って立っていた。

「……化け物……」

「化け物で結構よ……アンタだって……同じなんだからさ……」

「違っっ!!」

「でも、もう良いの……アンタは……この世からいなくなるから……」

「!!……やめなさい!!」

女は焦って止めようとしたが、水仙の振り上げたナイフは無惨にも振り下ろされた。

「っ……あっああくあ」

水仙は女の眉間にナイフを突き付けた。
刺さった瞬間、水仙は元の表情に戻った。

「「!？」」

眉間に付けられた傷に、水仙の血が滴り落ち、眉間の血が固まった。

そう見えたが、細胞が目に見えるほど大きくなり、ブクブクと泡のようになった。

そして、女の身体が膨れ上がってきた。

水仙は桜を抱えて、女と距離をとった。

すると女は、爆発した。

二人は、動けなかった。

声どころか、息すらも出来なかった

女は、跡形も無く消えてしまった。

二人は血が無くなったためか意識を無くした。

「……ここは？」

「おっ、起きたか」

「!!」

「……俺の名前は萩原」

「名字？」

「……名前は無いんだ」

「ふん」

「あ、そうだ。弟はそこだ」

変な男……萩原。

金髪で優しそうな顔。ヘタレにも見える。

綺麗なスカイブルーの瞳。

萩原が指差した方にカーテンで閉められてた。

萩原がカーテンを開けると包帯でグルグルに巻かれた弟が……

「サクラ!!」

「大丈夫だ。寝てるだけ……お前も怪我人なんだから寝てろ」

「でも……」

「休まねーとな!!」

「うん……」

嫌々ながらも布団に潜った水仙。
ふと気付いたことを聞いた。

「貴方は誰？そして、ここはどこ？」
「俺は、弟が起きてからで良いな？ここは、彩祈病院だ」
「さらき？」
「彩りを祈るってか？」
「聞かないでよ」
「お前・・・本当に三歳か？」
「・・・大人びててゴメン」
「いや・・・悪くは無いが・・・」
「ふああ〜」
「ふっ。やっぱ眠いか？」
「ん・・・」
「（一か月寝てたんだかな）」

眠りに入った水仙の頭を撫でながら考えこんでる萩原。

数日後

桜と水仙は同時に目を覚ました。

「萩原・・・」

「おっ、起きたか・・・」

「だ、誰？」

「弟は初めましてだな？俺は萩原だ」

「はぎわら？」

「名前無いみたい」

「ふ〜ん」

「さすが双子・・・同じ反応かよ」

苦笑いしながら言った萩原。

まだ、眠いらしく寝ぼけ眼で萩原を見る双子。

「さて、俺の自己紹介といくな？俺は萩原だ。名前は無い。趣味は
昼寝で、好きな食べ物は・・・」

「あのお」

萩原は、エッヘンという風に話したが水仙が話し掛けたから落ち込んだ。

「・・・なんだ？」

「「あなたは何者？」」

「・・・だから内緒だ」

「じゃあ質問かえる・・・」

「どうして病院にいるの？」

「・・・俺が君達を見つけたからだ」

「見付けた？」

「・・・血だらけだった君達を」

「!？」

「理由は言いたくねーよな？」

「・・・」

「まつ、いいさ。誰にも話したくないことがあるしな」

「萩原さん」

「呼び捨てでいい。取り敢えずお前らの名前は？」

「私は・・・水仙」

「僕・・・桜」

「水仙に桜だな」

初めてだったのかもしれない。過去でも、この先でも。私達の名前を笑ったりしなかったのは・・・そして、人の良さそうな笑顔を向けてきた。

「家はどっになったの？」

「・・・お前らのオヤジなのかな？ソイツが売り払った」

「え!？」

「・・・当分は、ここにいろ。その後のことは、退院する前に考えれば良い」

「うん・・・」

私達は、ずっと入院していた。
萩原は毎日のように通ってくれて色んな話をした。
私達双子が萩原に心が開いてくのは時間の問題だった。
だけど、それから数日後に事件が起こるなんて誰も知るよしは無かった。

「萩原遅いね」
「・・・そうね」
「スイちゃん？」
「ちよつと散歩しよつか？」
「うん!!」

この時、散歩なんて行かなければ良かったのかもしれない。

時は戻せない。

だけど、後悔なんてしてはいけない。
ただ、進むのみ……

「……なんです」

頭がポーツとする。
身体が動かない。
使えない頭を何とか振り絞って思い出す。
病院を出てから病院内の公園を歩いてると、桜の気配が消えた。
急いで振り返ると誰もいない。
いないはずは無い。
だって、自分の後ろを桜は歩いてたんだから……
だけど、自分の背後にいる誰かの気配に気付かなかった。

「ちっ……（私のせいか……）」

自分の不甲斐なさを責めながら周りを見回すと包帯が解けて、傷だ

らけの桜がいた。

「サクラー!!」

桜は気絶してるようだ。
まただ・・・

また、桜を助けられなかった。

「久し振りだな・・・水仙」
「!?!」

エコーのように響き渡る男の声。
一番聞きたくなかった声だ。

「なんで・・・」
「お前が悪いんだ・・・百合姫を傷付けたんだから」
「!?!」

百合姫・・・双子の母親。

本名は、百合^{ゆり}。

だけど、父親のみ、そう呼ぶ。

「・・・」

目の前にいるのは双子の父親の桔梗。

なぜか、水仙のみ手足に鎖が付けてある。

「や・・・いや・・・」

桔梗に倒された水仙。

もがいても、鎖と子供の力のせいで動かない。

「っ・・・ん」

「……っ お前が百合姫を殺したんだから」

「っ!!！」

身体の中に何かが入ってきてきて嫌だった。

苦しくて、惨めで、悔しくて……

誰も自分を助けしてくれない。

それが、すごく悲しかった。

熱い、熱い、熱い、熱い、熱い

痛い、痛い、痛い、痛い、痛い

なんで、こんな奴が生きてんだろっ……
生きてたくても死んでしまっ奴がいるのに……

悔しい……

「ハアハア・・・百合姫」

水仙の顔を撫でながら、母親の名を呼ぶ父親。
水仙は涙目で焦点が合っていない。

「ふふ・・・あはははははは!!」

男は狂ったように笑い出した。
水仙の耳に、もう声が届いてない。

だけど、唯一届いた音があった。
初めて聞いた拳銃の音。

だけど、なぜか安心してしまった。

「つか……は」

「え？」

突然苦しみ出した桔梗。

頭を見ると、こめかみに銃の跡が……

頭が上手く働かない。

なんで？

「大丈夫か二人共！！」

桔梗が床に倒れて、ピクピクと動き、やがて止まった。

呆然としてる時に、声が出た。

その声は安心出来て泣いてしまった。

「は、萩原・・・」
「!!!」

萩原は、水仙に近付いた瞬間驚いた顔をした。
そして、自分の着てたスーツの上着を水仙に被せた。
どうやら水仙の姿は、洋服がボロボロに引き裂かれてたらしい。

「水仙!!!」
「!!!」

そして、スーツの上から抱き締めた。
抱かれたことに驚いた。
しかも、嫌では無かった自分がいたことに、更に驚いた。

「・・・」
「ごめんな・・・遅れて・・・」
「つく・・・ひつく・・・」

今まで声を上げずに泣いてたのに、萩原の優しい声で大泣きをした水仙。
驚きながらも頭を優しく撫でた萩原。

「これから俺の知り合いの人のところに行くっからな？」
「なんで？」

あの事件から数時間後・・・

萩原の右手には水仙の手が。左手には桜の手が。
双子は悲しげに萩原を見る。

「そこは、デカイ学校なんだ。そこなら住みながら勉強出来っから

な

「萩原は!?!」

「俺は行かなきゃいけないーところがあるっからな」

「……………」

そして私達は、あの学園に入った。

私達双子の性格が歪んだのは…………

入園してから、数ヶ月後の萩原の死だった。

昔、約束したのにな…………

絶対離れないって…………

死なないって…………

あの笑顔で…………

Chapter 5 過去は過去のままで（後書き）

頭が痛いよ〜！！ギャグ書きたいよ〜！！壊れそうになりました。
頑張れ自分。

Chapter 6 生きとし生けるもの(前書き)

最後はハチャメチャです。ストーリーにあんま関係無い気がする。
ギャグが戻りつつある

Chapter 6 生きとし生けるもの

「……あつという間ね」

「……」

「私達が“子供を捨てて”から……」

「正確には“子供の人格”だけどね」

双子が、大人っぽい性格になったのは萩原という男が亡くなった。という事以外にも大人を信じられなくなった。という理由もある。

「……憎いけど、憎いけど、肉親だから」

「ん……」

双子がいる場所は、墓場。

双子の両親が眠ってるみたいだが、実際にいるのは父親だけ。

母親の百合は、水仙の“血”により破壊されたので、身体は破壊されたから残るはずが無かった。父親の桔梗は萩原に殺された。

でも、萩原だけが……

「なんで萩原の無いんだろっね」
「事故だって聞いたけど全く身体が無いのよね」

色々な手段で事故のことやお墓の場所を調べたが詳しくは不明だった。

「事故つてのは確かなのにね」

「うん……だけど萩原を学園長も知らなかった」

「でも……隠してるみたいね」

「正体……か」

「何者なのかしら」

「やっぱ神様？」

桜は苦笑い気味に言ったが、水仙は笑えなかった。
だって、桜を救うために神様に願ってしまったから。この“呪われた血の力”のことを。

「僕は、この血を呪ってないよ？」

「サクラ君……」

「だって、スイちゃんを守れるんだもん」

「……」

「例え誰かを殺してしまっても後悔はしないよ？」

「・・・血で濡れるのは私で充分だよ」

「・・・嫌だよ。スイちゃんが壊れてくの見たくない」

「私は・・・サクラ君がいれば壊れないわ」

「本当？」

水仙は桜の頬を撫でながら言う。

今まで見たことの無いような、綺麗な笑顔を見せた。

「・・・なんか、やっぱり卑怯だよ」

「だけどね、サクラ君が傷付いた時思ったの・・・サクラ君を狙ったり傷付ける奴は殺すって」

「それは僕だって・・・アイツの時は守れなかったから・・・」

アイツ・・・桔梗だろう。桔梗に狙われた時、桜は気絶してたから、ずっと気にしてたようだ。

「ごめんね・・・守れなくて・・・」

「サクラ君・・・」

桜は水仙の胸（心臓）に手を添え涙を流しながら謝った。

水仙は桜の手を覆うように握り締める。

「やっぱり同じ脈拍・・・」

「一生変わらないわ」

「・・・怖いよ」

「何が？」

「自分が自分で無くなることか」

「バカ・・・そうだったら私が叩いても自我を取り戻してあげるわよ」

「・・・うん。ありがとう。僕ね、スイちゃんの弟で良かった・・・」

抱き締めてきた桜にビックリしながらも抱き締め返した水仙。

いつもどおりに流れる血。

無くてはならないもの。

生きるための糧。

「私達は何がなんでも生きなきゃダメなのよ・・・アイツらと同じ場所には逝きたくないから」

「でも、今の僕らなら敵わないことは無いでしょ？」

いつもの笑顔に戻った桜。

その笑顔に不敵に笑った水仙。

「当たり前よ！今までされたことを数百億倍返してね」

「ふふっ・・・いつものスイちゃんだ」

「さっ、帰りましょうか・・・過去を振り返るのはやめましょう」

「だって、今を生きるんだもんね」

「ここには二度と来ないわ」

「僕達の親は作者だけだもん」

うう・・・嬉しいこと言ってくれるじゃん。

つてか、久し振りですよ。作者自身のセリフ(?)

暗い話ばかりだったから・・・

「仕方無いわよ。私達の過去が暗いもの」

「でも、これからは暗くは無いよね?」

グロいのは変わらないと思うけどギャグはいれるつもりです。

「ギャグなんてあったかしら?」

「そうだね。つまらなかつたし・・・」

水仙ちゃん！！！！

桜くんまで！！

まあ気を取り直してどこ行きますか？

「過去編が終わったからってネタ切れしないでよ」

「あんまり考えて無かったんだね」

短編から始めましたから・・・
うゝむ・・・
異世界行ってみます？

「「イヤだ」「

ですよね」。

「萩原のネタを作れば？」

「短編とかで・・・」

人気が出たらね。

無いうちに書いても無駄じゃないかな？

「作者的に萩原気に入ってるでしょ？」

「一応美青年だし・・・」

はい。だいぶ好みだったり・・・って何言わせてんですか
！！

よし、萩原のプロフィールを危なくない位考えますか。

「「危ない”って何？」」

なんだろう？

ネタバレじゃないかな？

萩原の正体や下の名前とか・・・

「「気になる！」「」

ダメです!!
ネタバレだから。
取り敢えずは・・・

「言いかけてた好きな食べ物は？」

「あと好きな人とか」

「!?!」

好きな食べ物は、牛丼らしいです（案外普通？）
もしか、水仙の初恋が萩原だったりしますか!?!

「ネタバレじゃないの？」

「・・・（スイちゃんの初恋）」

まあ、恋愛要素は無いつもりですが短編を出すなら作るのかな?と
・
・

「じゃあ僕とスイちゃんの話!!」

桜くん・・・もしや君・・・シスコンだったり?
禁断ストーリーは作りませんから残念!!

「（消えるよ作者）」

「他には？」

桜くん。やっぱり黒いね。

他は・・・オリキャラ達の恋愛とか友情かな？

「「却下」」

「自分達以外が活躍するのは気に入らないわ」

わがままっ子め・・・

あ、萩原の容姿はまだでしたね。

「金髪でスカイブルーの瞳だけ」

「へタレっばい」

へタレは容姿ではありません。

身長・・・183.5cm

体重・・・70.2

なんか微妙ですね。

なんか書いてて、とあるマンガのへタレな青年っばい容姿になった気が・・・

「だって作者、そのドジな人好きじゃない」
「初めて他の次元の話が出たね」

絶対に出さないようにしてただけだね。萩原さんが妙に、その力
ツコいいお兄さんになっちゃって・・・
分かる人には分るよね？
オタクさんやマニアさんならば・・・

「話が脱線の上に脱線しちゃったよ」
「萩原はドジでヘタレじゃないわよね？」

はい。多分・・・
ヘタレの部分は、貴女達が何もしなければ・・・

「生きてるのかどうかさえ教えてくれないの？」

すみません。
考え中です。

あえて萩原で新たなストーリーってのも面白そうだし・・・

「それよりも怪盗も出しなよね!」
「かつこよく居なくなっただわりに出番無いし……」

確かに……彼のプロフィールも作らなくては……
まあ、怪盗だから秘密だらけなんだけど……

でも、彼の弱点はチビとかだっただら笑えるよね?

「どのくらい?」

身長……165cm
体重……51

男で、この身長は……
萩原や蓮先生よりも小さい。
年齢は……20歳位

数年前(三年前)に突如行方を眩ました。
始めたのは14歳頃らしいが……
なぜ、盗んでるかは不明。

「けっこう若いのね」
「蓮先生だったら面白いのに……」
「確かにね」

黒い髪で、黒い目です。
目立たないようにしてますが・・・
美青年のため無駄に終わるらしいです。

「作者くどうやって個人情報を知ってる？」
「ある意味、作者危険」

作者が考えてるんだもん当たり前でしょ！！
足りない頭使ってるのに失礼な双子だ。

「いつ終わりなの？」

終わりの見込みがありません。

「見切り発車にご注意を」

もう遅いです。
強制的に終わらせるか。
アニメのように・・・

「ダメ!!」

「私達はまだ活躍したいわ!!」

だから、彼女達の旅はまだまだ続く……って感じに。

「結局は終わりじゃない!!」

「やっぱり短編からのストーリーに問題ありなんだね」

違うよ。グロい話だから具合が悪くなってきて……

「ピーで隠したら?」

「何言ってるか分からなくなるよ」

だからっていきなりグロいの無しです……なんて無理だし。

「……学園は?」

「みんなイビリ」

え!?

こえーよ水仙ちゃん。

イビリは毎回のことだし……

学園ストーリーか……

お化け屋敷にでも行きますか？

「お化け役の人を苛めるか」

「良いね!」

やっぱ・・・やめよ・・・やりますから!!黒いオーラ消して!!

ということで・・・はあ・・・次回はお化け屋敷ネタらしいです。

苛めまくるみたいです。お化け役の人や同級生を・・・

Chapter 6 生きとし生けるもの(後書き)

あんま意味が分からんな。グダグダだったし・・・ああ!!ヤバい!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2955f/>

Dirty twin blood(連載Ver.)

2011年1月28日15時21分発行